２０２０年１１月３０日（月）

老球の細道５７８号

１１月の言葉

会津バスケットボール協会　室　井　冨　仁

今月は父母の命日、叔母の葬式が重なり、改めてパスカルの「人間は生まれながらにして死刑囚である」という名言を思い出した。当たり前のことであるが、絶対避けられない現実を考えると、毎日の重みを意識させられる。爺様などと言って安穏としてはいられない。「今日という日を懸命に生きてゆく蟻であっても僕（爺）であっても」（萩原慎一郎作）

１・テレビから

◆「散りぬべき　時知りてこそ　世の中の　花も花なれ　人も人なれ」〈NHK：歴史秘話ヒストリア：戦国を生きた女性・細川ガラシャ〉： 大河ドラマ「麒麟が来る」を毎週楽しみに。戦国の理不尽な社会の中で、周囲に左右されず、自分の生きざまを貫き通した強さ、純粋さは凄い。花は散る時を知っているからこそ最後まで美しく咲く。私もそうありたい。

◆「最大の功績は長寿かな」〈TV ニュース：ショーン・コネリー〉： トミカで昔のボンドカーを購入して孫に与えている。小学校時に初めて見た００７。恰好よかったなあ。コネリーは年をとってもダンディ。私も年を追うごとに成長を重ね、恰好は無理なので純粋でいたい。

２・読書から

◆「一寸を譲れば、一城を譲る」〈倉田百三『超克』角川文庫〉：バスケットボールのゲームは１回のミス、１本のフリースローで勝敗を決する。日常生活からコートの中まで同じ。「こうしなければならない」という小事をおろそかにしないことを自戒したい。

３・新聞から

◆「やれば、できるよ」〈朝日：キリン解体新書：郡司芽久〉：ノーベル物理学賞を受賞した故小柴昌俊氏の言葉である。ありきたりのシンプルな言葉であるが私も幼少の頃亡き両親によく言われた。これならやれると思うことを、決して途中でやめないで、やり続け、温め続けると夢の卵は孵化することがあるものである。

◆「甲子園は“行きたい”ではなく“行くんだ”と思え。勝てる雰囲気ができたチームが勝つ」

「基本的にリードしていれば手堅く、負けている展開なら大胆に」〈朝日：木内幸男：元高校野球監督〉：色々な大会で選手、コーチ達に伝えたいメッセージである。「人間は立ちたいと思ってから立てた」。何事も強く思わない限りは今までの歴史は変わらない。

◆「見知らぬ町に行くと、自分の人生の B 面に出会うような感じがして、こういう人生もあるのか、と思うとまた元の人生に戻っていけるんです。逃げていい。逃げ先はたくさんあるよ」〈朝日：教育：燃え殻さん〉：得意な A 面だけで勝負しているとワンパターンになり、慣れ、ダレの地獄が襲ってくる。人生の B 面を色々なところにキープしたい。

◆「役つくりは原作を読み直すところから始めた。千回以上演じた役でも“今度はこうしよう、明日はこう演じてみよう”の臨む」〈朝日：天声人語：坂田藤十郎〉：練習はできることの繰り返しではない。常に小さくとも新たなチャレンジ、アレンジがなくてはならない。